

幼児の描画能力と遠近描写に関する一研究

緒方章 嗣

(近畿大学九州短期大学)

幼児は年齢が上昇するにしたがって、運動能力や知能の発達と共に知覚能力、造形力が発達していくといわれている。しかし、造形力が著しい発達を示し推移していく4歳児、5歳児、6歳児の遠近描写の能力に関しては必ずしも明確ではない。このことから、各年齢の幼児において、遠近間をもつ描画対象物をどのようにとらえ表現していくかを明らかにすることは、この時期の幼児の描画能力の発達を総合的に把握する上で重要であると考えられる。また、幼児の視力については、4歳児で70%以上が視力1.0、5歳児で80%以上が視力1.0、6歳児では全員が成人の視力1.0にまで発達して両眼視が完成すると言われている。そこで、本研究では、4歳児、5歳児、6歳児に遠近間を設定した2個のリンゴの絵を描かせ、幼児の年齢が上昇していくにしたがって、どのような遠近描写能力を発揮し、どのような遠近描画の結果が現れてくるかを調査し、その結果を基に各年齢別での推移とその発達の特徴をイメージ面による子どもの映像的表象の発達に関する一研究(緒方、宮原、1996)との関係をも鑑みながら考察し検討するものである。

方法

被験児：福岡県内にある3つの保育園の幼児、4歳、5歳、6歳の男児121名、女児125名、総計246名。各年齢の人数と平均年齢、および、年齢の標準偏差(SD)の内訳は次のとおりである。4歳児：90名、平均年齢、4.5歳、SD=2.6、(男児43名、平均年齢、4.5歳、SD=2.8、女児47名、平均年齢、4.5歳、SD=2.5)。5歳児：67名、平均年齢、5.4歳、SD=2.1、(男児33名、平均年齢、5.4歳、SD=2.1、女児34名、平均年齢、5.4歳、SD=2.1)。6歳児：89名、平均年齢、6.5歳、SD=2.5、(男児45名、平均年齢、6.5歳、SD=2.5、女児44名、平均年齢、6.5歳、SD=2.6)。

用具：幼児の描画においては、4歳、5歳、6歳の幼児に描画用具として16色のクレパスを描画に使用させた。また、描画紙としてB4サイズの白画用紙を用いた。

実施方法：実施に際しては、幼児用の机(45cm×90cm)を2たつたなぎ(1m80cm)、その上に遠近描写の素材として使用する同じ大きさの2個のリンゴを机の上に約1m50cmの間隔をとって置いた。また、被験児の描画用の机はリンゴを置いた机に対し、幼児2名ずつが一緒に描画できるようにT字型に設置した。被験児の全員には、リンゴをありのままに描画するよ

うに指示を与えた。また、お互いに隣の幼児の絵を模倣しないように注意した。描画に要した時間は約10分である。

遠近描画の分析：幼児が描いたリンゴの絵の分析は、幼児がリンゴの描画に取り掛かる前に、幼児全員に対して、どちらのリンゴが近くにあり、遠くにあるか、と、どちらのリンゴが大きく見え、小さく見えるかを質問して口答での確認をおこなった。また、明らかに距離間を表現して描いた絵と距離間を表現しないで描いた描画を選別し、「遠近あり」、「遠近なし」の2項目に分類してCR検定とX²検定を行った。

さらに、被験児のリンゴの描画のなかで、3個以上のリンゴを描いた絵、表現の曖昧な絵、幼児の月齢が接近している絵などは調査の対象から除外した。

結果

被験児個々に対するの質問内容である、どちらのリンゴが近くにあり、遠くにあるか、どちらのリンゴが大きく見え、小さく見えるか、に関しては、被験児全員から口答で正確な答えを確認した。

次に、表1から表4は、被験児246名の遠近描写に関する2項目の結果を表したものである。

表1の各年齢別でのCR検定の結果は、4歳児で有意差が無く、5歳児で $p < .05$ 、6歳児で $p < .01$ の有意差がある。

表2の各年齢での男児、女児別のCR検定の結果では、4歳児、男児女児とも有意差無し、5歳児、男児有意差無し、女児 $p < .05$ 、6歳児、男児 $p < .01$ 、女児 $p < .01$ で有意差がある。

表3の隣接する年齢間でのX²検定の結果では、4歳児と5歳児間で $p < .05$ 、5歳児と6歳児間で $p < .001$ の有意差がある。

表4の男児、女児別の各年齢間でのX²検定の結果では、男児、4歳児と5歳児間で有意差無し、5歳児と6歳児間で $p < .05$ の有意差があり、女児では、4歳児と5歳児間で有意差無し、5歳児と6歳児間で $p < .01$ 有意差がある。

考察

本研究の結果について幾つかの考察を行う。まず、被験児個々に対するの本調査に関する遠近の認識の確認では、間隔をおいた2個のリンゴの遠近と、それで生じる大小関係での視覚的な認識において、被験児全員から口答で正確な答えを確認できたことから、4歳児、5歳児、6歳児は描画対象になる2個のリンゴの

遠近の位置関係とそれによる大小の見え方については、視覚的に正確にとらえてその状態を把握することが可能であることがわかる。

次に、表1のCR検定の結果において、4歳児では有意差が認められず、5歳児では5%水準、6歳児では1%水準で有意である。このことは、4歳児の遠近描写率47.8%での描画形態の特徴としては、観察した対象物を描画で再表現（再提示）しようとする際に一時的な観察だけで済ませてしまい、瞬時に獲得した自分の映像的記憶のイメージのみに頼って描画を続行していく傾向が多く見られた。よって、4歳児の半数弱は、表象として不安定で正確さを欠く要素をもつ映像的表象のみに頼る傾向を示していることが推測できる。次に、5歳児、6歳児の遠近描写では、年齢の上昇につれてその描画は5歳児、64.2%、6歳児、88.8%と上昇し推移する。そして、その描画形態の特徴は、4歳児とは異なり、描画中における観察回数が徐々に多くなり、複雑な関係にある対象物をより正確に把握しようとして繰り返し観察する傾向が見られるようになる。このことは、(緒方、宮原、1996)の結果においても示された様に、描画の精緻化能力の発達にも関連していることが考えられる。

また、表2の各年齢における男児間、女児間での比較では4歳児は共に有意差無し。5歳児は男児が有意差無しで女児が5%水準で有意である。よって、5

歳児では女児のほうが男児より遠近描写能力が優勢に進んでいることがわかる。また、6歳児で男児、女児共に1%水準で有意であるということは、6歳児ぐらいになると観察力と描写能力が増大して、顕著に遠近の描写能力が発達していることを示している。

さらに、表3の隣接する年齢間でのX検定では、4歳児より5歳児のほうが5%水準で有意、5歳児より6歳児のほうが0.1%水準で有意差を示しており、年齢の上昇につれて的確な描画が行われていることがわかる。また、表4での男児、女児別の隣接する年齢間でのX検定の結果においても同様なことが推測できる。

以上のことから、4歳児、5歳児、6歳児間では視力が発達するにつれて遠近表現の描画能力も発達していることが認められた。また、ものの遠近や大小に対しては、視覚的に正確に把握できているにもかかわらず、描写結果としての描画では、その視覚的な正確さとは必ずしも一致しなかったことは大変興味深い。

今回の幼児の遠近描画調査では、2個のリンゴの間隔の遠近描画に関してのみであり、大小関係の表現に関しての調査は行っていない。しかし、本研究での幼児の遠近描写の描画能力をさらに明らかにしていくためには、ものの遠近関係を描画しているかどうかを、より正確に知るために、遠近描画の表現において重要で不可欠な要素である大小関係に関する再調査が必要であると考えられる。

表1 幼児の年齢別の遠近描写

	4歳児		5歳児		6歳児	
人数	90		67		89	
平均年齢	4.5		5.4		6.5	
標準偏差	2.6		2.1		2.5	
遠近描写	あり	なし	あり	なし	あり	なし
人数	43	47	43	24	79	10
%	47.8	52.2	64.2 *	35.8	88.8 **	11.2

*p<.05 **p<.01 (標準偏差は月齢より算出)

表2 幼児の各年齢における男女別の遠近描写

	4歳児				5歳児				6歳児			
	男児		女児		男児		女児		男児		女児	
人数	43		47		33		34		45		44	
平均年齢	4.5		4.5		5.4		5.4		6.5		6.5	
標準偏差	2.8		2.5		2.1		2.1		2.5		2.6	
遠近描写	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
人数	21	22	22	25	20	13	23	11	38	7	41	3
%	48.8	51.2	46.8	53.2	60.6	39.4	67.6 *	32.4	84.4 **	15.6	93.2 **	6.8

*p<.05 **p<.01 (標準偏差は月齢より算出)

表3 幼児の隣接する年齢の遠近描写

年齢	全 体		
	4歳	5歳	6歳
遠近あり	43 *	43 ***	79
遠近なし	47	24	10

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表4 幼児の男女別の遠近描写

年齢	男 児			女 児		
	4歳	5歳	6歳	4歳	5歳	6歳
遠近あり	21	20 *	38	22	23 **	41
遠近なし	22	13	7	25	11	3

*p<.05 **p<.01